

〈巻頭言〉

社会への関心を広げよう

複眼的日本古代学研究の人材育成プログラム代表

石川 日出志

考古学の発掘調査は、一種の土木工事でもあるので労働安全衛生規則が適用され、日本で遺跡を手掘りで深さ2 m以上（5 m未満）掘り下げる場合は垂直に掘削することはできず、75°の法面（傾斜）をつけなければならない。2 m四方を発掘するのに、深さ2 m未満なら垂直に掘り下げられるが、例えば地表下3 mで2 m四方を掘ろうとすると75°の法面が必要で、地表では約3.6 m四方の広さとなる。発掘深度が深くなればそれだけ地表の発掘面積は広くなる。

言うまでもなく、どの分野であれ、学問研究を進めるといのは、ある課題をより深く掘り下げることである。ある深さまではまっすぐに掘り下げることはできるが、それ以上になると法面を確保するために、研究の間口を広くとる必要が生じる。研究が深化するに応じて、その分野の基礎体力を強くしその広がり確保する必要がある。「複眼的日本古代学研究の人材育成プログラム」はそうした趣旨から設けられた取組みである。研究のタコツボから脱して関連分野の研究法や成果を学ぶことを通して、広い視野と柔軟な思考を育成しようとするのである。

また、近年、学問研究の成果は、研究者個人の財産であるだけでなく、国民や人類の共有財産＝公共財であるという考え方が社会に浸透しつつある。研究には国民による支援経費が充当されているからというだけではない。研究成果自体がそもそも公共財であり公開されなければならないと考えられている。現在、日本学術会議が1950・67年総会で戦争目的・軍事目的の研究は行わないと議決したことに見直しを求める動きがある。民生用・軍事用を切り分けられるのかということ以上に、軍事用では研究成果の公開性が担保されない点が問題だということも、研究成果は公共財だという考えが根本にある。日本古代学研究は、一般社会からは桃源郷のような分野とみられており、きな臭い研究はあり得ないと思われていようが、果たしてどうであろうか。単に自分分野の基礎体力をつけるだけでなく、ふだんから社会への開かれた眼を養っておかないと、そうした判断はなしえない。

どの学問分野であろうと、研究に携わる者は社会への関心を広げる努力を怠ってはならない。それは、自分の研究を遠くに突き放して見る、そうした力を養うことでもある。促成は困難であり、一歩ずつ進むしかない。